

熊本市長 大西一史 様

立野ダムによらない自然と生活を守る会

代表 中島康

ダムによらない治水・利水を考える県議の会

代表 西 聖一

立野ダムによらない白川の治水を考える熊本市議の会 代表 田上辰也

代表連絡先 熊本市西区島崎4丁目5-13 中島康 電話 090-2505-3880

立野ダム建設要望に対する抗議文

報道によると、8月19日の「白川改修・立野ダム建設促進期成会」の国土交通省への要望で、貴職は立野ダム建設事業を着実に進めるよう求めたとのことです。

国土交通省の「立野ダム建設に係る技術委員会」は、初会合からわずか3週間で3回の会合を行い、あっという間に「立野ダム建設に技術的な課題はない」との結論を出しました。国土交通省が選んだ7名の委員も、国土交通省の見解に疑問を呈することはありませんでした。委員会の開催についても、わずか2日前に国土交通省立野ダム工事事務所のホームページに掲載するだけで、ほとんどの住民が委員会の開催を知ることさえできませんでした。

住民の主張に対し、同委員会の見解は「立野ダム建設予定地に考慮すべき断層はなく、岩盤の健全性に問題はない」。流木や巨石で立野ダムの穴（高さ5m×幅5m）がふさがり懸念については「ダム本体の200m上流に建設するスリットダムと、穴の前に設置するスクリーンによってカットでき、穴がふさがりことはない」と結論付けました。

しかし、今回の地震による土砂崩壊とその後の増水で、熊本市内など下流の橋脚には多くの流木が引っかかりました。有明海にも大量の流木が漂着・漂流し、7月末までに1万6000立方メートル以上が回収されたと報じられています（熊本日日新聞2016年8月15日付）。それらの大半は阿蘇カルデラ内で発生し、立野ダム地点を通ったわけであり、スクリーンやスリットダムで防げる量ではとてもありません。現に、直径約10mの立野ダム仮排水路トンネルの入り口は、土砂と流木でふさがっています。

国土交通省が立野ダム下部の穴が流木などでふさがらない理由として、穴の上流側を覆うスクリーン（柵）をふさぐ流木が、ダムの水位が上がると浮いてくるとしています。その元となった模型実験では、ダムの穴をふさぐツマヨウジなどの円柱材が、ダムの水位が上がると浮いてくるとしています。しかし、実際の流木は根や枝がついており、水を吸って比重も大きくなっています。流木を穴が吸い込む力は、流木の浮力よりもはるかに大きいのは明らかです。実際の洪水では、流木も岩石も土砂も一緒に流れてきますが、今回の検証では流木、岩石、土砂、それぞれ単独で模型実験やシミュレーションを行っただけです。立野ダムの穴がふさがらないとする国土交通省の主張はありえないことです。

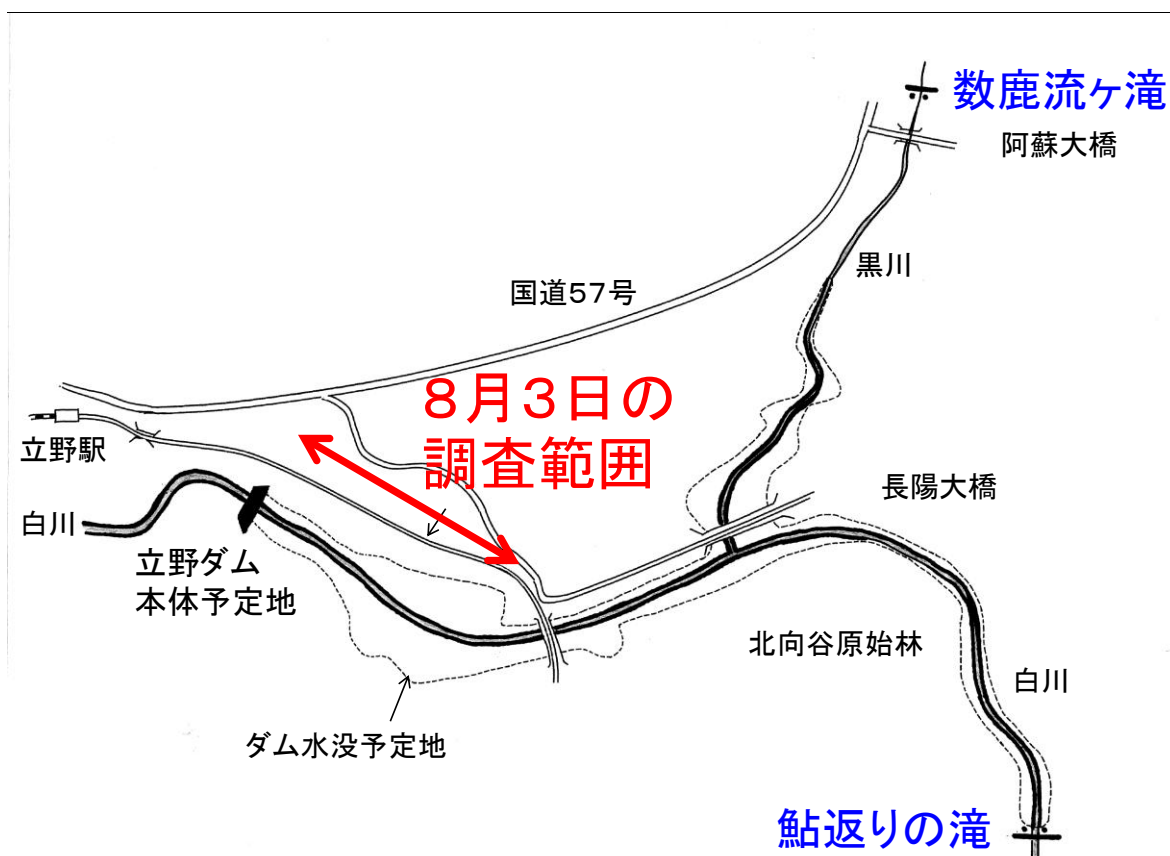
立野ダム完成後にこの地震が起こったとしたら、ダム水没予定地周辺の大半の地盤が大きく崩れていたわけであり、ダム上流は多量の土砂や流木で埋めつくされ、立野ダム下部の幅わずか5mの穴がふさがり、ダムへの流入量を貯め込むばかりとなり、洪水調節機能を果たせないばかりか、非常に危険な状態になっていたのは明らかです。にもかかわらず、国土交通省の従前の主張をそのまま容認した「立野ダム建設に係る技術委員会」の終結直後に、貴職が同事業を着実に進めるよう同省に求めたことに強く抗議するとともに、下記3点について要請します。

記

1. 熊本県民の人命・財産を危険にさらす立野ダム建設を即時に中止するよう、国土交通省に求めること。
2. 住民も含めた「立野ダム建設に係る技術委員会」を結成し、立野ダム建設予定地周辺の岩盤や活断層、地すべりなどについての十分な再調査・再検討を行うよう、国土交通省に求めること。
3. 立野ダム建設に関して住民の疑問に直接答える説明会を開くなど、流域住民に対し説明責任をきちんと果たすよう、国土交通省に求めること。

以上

(資料1)立野ダム水没予定地(点線)と8月3日の調査範囲(赤い矢印)



(資料2)立野ダム水没予定地(点線)と8月3日の調査範囲(赤い矢印) 航空写真(アサヒグラフより)



有明海に流木 漁業者警戒



熊本地震に伴う山腹崩壊に梅雨の豪雨が重なり、大量の倒木などが河川から有明海に流れ出た。県や国によると、7月末までに流木を中心に漂着・漂流物を1万6千立方メートル以上回収したが、まだ海上を漂っているものが相当ある。わずかに十数センチ四方の木片でも航行中の漁船が巻き込めばスクリーンや船体を壊し、事故につながる恐れがあるため、漁業者からは警戒を強めている。(猿渡将樹)

「よっしゃ、流木と船をロープで結べ。沖に引っ張り出すぞ」4日午前、熊本市西区松尾町の海岸に漁師らの大きな声が響いた。男たちは海岸の岩場と近くの漁船に分かれ、満ち潮に乗って打ち上げられた流木を何本も近くの百貫港までえい航した。

この日は同港を拠点とする松尾漁協が周辺漁場や沿岸の清掃に漁師約20人を動員。漁船5隻を使い、4時間で大小100本余りの流木

「ノリ養殖への影響が心配だ。これから漁場に支柱を立てたり、網を張ったりするが、流木が引っ掛かったら支柱や網ごと流失しかねない」と同漁協の多森雄二さん(42)。別の漁師も「日中を避けて

を回収した。中には人力では到底運べない直径50センチ、長さ10メートル超すスギもあった。漁師らは船を慎重に操っていたが、2隻のスクリーンが漂流物で損傷し修理に回された。

地震、豪雨影響

スクリーン損傷 ノリ網流失恐れ



流れ、熊本港の遊休地に山積みされた流木。1メートルを超える巨木もある＝熊本市



養殖シーズン控え回収急ぐ

作業することが多いが、このままなら視界が悪い夜間は航行が難しく、作業はできない」と話す。熊本県は全国屈指のノリ産地。年間出荷額は100億円前後で、有明海の漁業の大黒柱だ。松尾漁協の清掃活動は、9月から準備が本格化するノリの養殖シーズンを前に、流木の危険性を少しでも減らす狙いがあった。

熊本市の白川河口から有明海に流出。流木は風や潮流の影響で北上し、同市西区の百貫港や河内港に押し寄せた。その後、玉名市や荒尾市、大牟田市付近まで流れ、拡散したという。

回収は沿岸付近を主に県が担当し、沖合は国が受け持っている。県はクレーン付きの作業船を持つ業者に沿岸付近の回収作業を委託している。

備事務所にすると、流木の大半は梅雨の豪雨で熊本市の白川河口から有明海に流出。流木は風や潮流の影響で北上し、同市西区の百貫港や河内港に押し寄せた。その後、玉名市や荒尾市、大牟田市付近まで流れ、拡散したという。

回収は沿岸付近を主に県が担当し、沖合は国が受け持っている。県はクレーン付きの作業船を持つ業者に沿岸付近の回収作業を委託している。



託。この結果、熊本市からにかけての海岸に漂着し、回収が大幅に進んだが、おち潮の度に流木が新たに漂着する。一方、漂流中の流木は同様に難しくなっている。流木は、海面から一部を出さなくなった。当初は塊になって海を漂っていたが、近はバラバラに拡散し天音も見つかった。

沖合の漂流物の回収に当本港湾・空港整備事務所は環境整備船「海輝」などを使って作業しているが、「目搜索は、運動場に落とすのを採り回すようなもの。1の回収が限界」と悩ましている。同事務所は「台風などで水位が増せば、上流域の河に引っ掛かっている倒木がにまた流れ出てくる。海にる前に少しでも回収を進めるが大事だ」と話している。